

龜谷
行編

脩身兒訓

四

東 京 圖 書 館

新書門

十三部

八類

函架

冊號

K110.1

30a

4

K110.1

99G

東周館

修身見訓卷之四
第...章...
厚徳

龜谷行編

○今の人。恩恵を受けてハ。多く記省せず。人
よ恵む所あれバ。微物と雖ども。亦歴々心
在り。古人言ふ。人ハ施してハ念ふ勿き。施を
受けてハ忘る。勿きと。袁氏世範
○凡、恩澤を報いざるの地。施チ。便チ是陰徳

修身見訓

卷之四

光胤社藏版

を積り。以て子孫み遺をふり。人を以て怒ると雖ども。敢て言をざらむ。便是陰徳を損をる處あり。言行彙纂

○唐の王仲舒。寶帶を賣りて。橋を澹臺湖に築く。長三十餘丈。以て行人を濟せ。世之を寶帶橋と名づく。後三子皆貴顯あり。丹桂籍

○人妄り。樹木を毀損し。又蒸餅菓實。其他有益の物を棄つるを。是天の賜ものを無益小失ふの罪あり。若し此等此物を以て。窮餒

此者小與へば。慈惠の一端あるを。勸善訓蒙

○晉陵の梅鱗。生平義を重んじ。慷慨施を好む。中年子あり。善を嗜むこと益篤し。親戚窘乏の者あまば。輒之を救ふ。里黨の中咸仁人

長者を以て之を頌を。後二子を生子。家業巨萬。壽七十小至る。丹桂籍

○高郵の張百戸。淮安に往き。舟を湖堤に泛ぶ。遙く小船の波上小浮沈をるを見る。人あり舟に背み據り。救ひを呼ぶ。張急小白金十

兩を出し。漁舟を呼びて之を救ふ。至れば其子あり。同上

○蜀漢の張裔。少くして楊恭と友と善し。恭卒を遺孤未だ數歳小及をす。裔を恭が母を迎へて之小事へ。恭が子の爲め婦を娶り。田宅を買ひて之と與ふ。人其義を重んじ。後益州の太守と爲る。同上

○宋に吳奎少き時甚貧し。後資政殿大學士み除せらる。青州小知たり。是に於て田を買ひ義莊とす。以て族黨朋友を賙え以没せしるの日小至り。家小餘資なし。宋史吳奎傳

○宋に祖無擇。人とあり義を好みて。師友に篤し。少くして孫明復に從ひ。經術を學び。又穆脩小從ひ。文章を爲る。兩人死す。力めて其遺文を求め。彙めて世小傳ふ。宋史祖無擇傳

○宋の沈倫。相位に在るの日。歳に饑うる小値ひ。郷人に粟を假る者多し。皆之を與へ。殆んど千斛小至る。後又盡く其券を焚けり。宋史沈倫傳

○陳璣家甚貧。義を行ふ急かり。常小諸子を戒めて曰く。貧乏の者小遇をば。宜しく力よ隨ひ。之を賑ふべし。若し富を待て。之を行ふをば。吾が輩終よ人を濟ふの期あらん。録 畜徳

第二章 躬行

○荀子曰く。凡そ百事の成るや。必之を敬る。不レ在り。其敗るや。必之を慢る。不レ在り。故よ敬怠。小勝てば吉。怠敬。小勝てば凶レあり。

○貝原益軒曰く。凡そ事を作をみ。始を謹し。終を慮まば。過寡く悔少し。故小事を作をせむ。先づ思ふ。思ふば。輕率レ事レ作レせむ。必之過ちあり。過てば。必之悔あり。初學 知要
○又曰く。學を思ひ。不原づく。と雖レも。間思雜慮。甚ど心術レ不害あり。學者須らく胸中を以て泰然事レふ。以て有用の思慮。應接を待つべし。

○又曰く。輕情ニ此者ハ學を爲むの大病ナリ。輕き者ハ未ど得ざるを以て既よ得ること爲し。情る者ハ悠緩ナリて。進むこと能はず。張子曰く。輕きを矯め。情るを警せと。

○又曰く。學者固より當小勉強して懈らざるを。又須らく心志を寛舒し。精神を愛養すべし。此の如くなまを。局促の態なく。從容の象あり。二此者並び行なれて。相悖らざるべし。

○陳了翁。閒居きと雖ども。容失常。莊敬ナリ。苟も言を發せど。一日家人と語る。家人戲き小問ふ。是實なりや否やと。公退て自ら責ること累日なり。曰く。吾豈小人を欺くことあるや。何爲きぞ此問ひあるや。劉氏譜

○宋に趙康靖。嘗て二瓶を几上よ置き。一善念を起す毎に。一白豆を投下。惡念小ハ一黑豆投下。始めハ黒き者多し。既よして絶て少し。久けきハ善惡都て忘る。瓶豆も亦用ぬ

丹桂
籍

○清の張敦復曰く。人の家小居り。身を立つる。最奇を好むべからず。人能く倫常小於て缺くることなく。起居動作。家を治め人を待つ。事々矩度小合ひ。便是君子の人。豈よ別み奇を尋ね怪を求むなけんや。聰齋訓語

○宋に劉元城。司馬温公を見て。心を盡し己を行ふの要。以て終身之を行ふべき者を問ふ。温公曰く。其を誠う。元城問ふ。之を行ふ何

をう先よせん。温公曰く。妄語せざるより始まる。小學

○中庸小曰く。君子の及ぶべからざる所は者ハ。其惟人の見ざる所。程子曰く。學を闇室を欺らざるより始まる。

○元の許魯齋。河南を過ぐ。道小梨あり。衆爭ひ取りて之を啖ふ。魯齋獨取らば。或人曰く。世亂きて主なく。之を取るも何ぞ傷らん。魯齋曰く。我が心獨主ならんやと。卒よ取ら

ぞして去る。丹桂籍

○蘇黃門。凡そ日中爲る所の事。夜必ぞ之を紙小記す。人其故を問ふ。曰く。事を爲せを必び天理に循ふ。敢て記せざる者ハ。敢て爲さざるあり。同上

○羅馬帝テオドシウス。その志善を行ふよ急あり。毎夜。日間の爲る所を省視す。或ハ一善なけれバ。懊惱して曰く。嗚呼。余一日を失ふと。西稗

雜纂

○佐藤一齋曰く。均しく是人あり。游惰なきを弱かり。一旦困苦なれば強となる。意よ慚へバ柔なり。一旦激發すまバ剛とある。氣質の變化をること此の如し。言志錄

○明に蔡虛齋曰く。道德有る者ハ必ぞ多言せず。信義ある者ハ必ぞ多言せず。才謀ある者ハ必ぞ多言せず。惟夫此細人狂人妄人乃多言をる也。劉氏譜

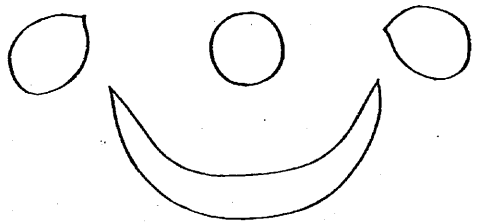
○明の薛敬軒曰く。人口を開けば皆能く禮

義を談ト。名節を論ず。利を見る小及てハ。必
ど趨り。勢と見てハ必だ附く。又禮義名節の
何物たるを知らざる也。畜徳録

○宋の邵康節。其子伯温小告て曰く。汝固よ
り當よ善と爲まべし。亦須らく力を量り。以
て之を爲まべし。若し力と量らざれば。善と
雖ども。亦爲す處あらじ。同上

○宋此潘叔度ハ。呂伯恭と同年進士なり。叔
度年長トて。其學伯恭小如らず。即首を俯し。

平心則無偏



弟子の禮を執り。之小
師と一事へ。略難む色
ふし。朱子甚だ稱歎を

劉氏譜

○明の大祖曰く。凡そ
人善あまじ。自ら矜
る處あらじ。自から矜
れば。善日小削らる。不
善あらを。自あらず。恕を

べうらび。自あらず怒をまきば。悪日小滋す。

○又曰く。人の常情。多く己が能ふ矜り。多く人れ過を言ふ。君子ハ然らば。人の善と揚げて。己が善小矜らず。人の過とゆるして。己が過をゆるさず。

○自あらず謙をまき。人愈服し。自う誇れば。人必だ疑ふ。我恭ふれば。以て人の怒氣を平らよすべく。我貪をまき。必だ人れ争端と啓く。致致を。是皆我小存する者あり。金言

○明の文徵明。人れ過ちを聞くことと喜たず。道ひ及を人と欲する者あれば。必だ巧み他端と以て之を易へ。其説を竟へ。志めば。其孫震孟。狀元小中り。名行俱よ隆し。丹桂籍

○宋れ范忠宣。子弟を戒めて曰く。人至愚と雖ども。人を責むるふも明あり。聰明ありと雖ども。己と怒るときハ昏し。但當小人を責むるの心を以て己を責むべし。習是編

○韓非子曰く。智を目れ如し。能く百歩の外

を見て。自うら其睫を見ること能はず。故よ知るの難きを。人を見るふ在らずして。自あら見るよ在り。故よ曰く。自かろ見え。之を明と謂ふ。

○力餘りあまを好事を行ひ。力足らざれば。好心を存す。力足らざして。勉めて好事を行ふ。眞は是好事あり。力餘りあまて。徒ら好心と存するハ。好心と謂えざる也。習是編

○章文懿嘗て言ふ。學者身を奉むるハ。華侈

を好むべあらば。苟も華侈を好めば。必ず貪り得るふと致す。他日官小居り。決して清白あること能はず。同上

○外よハ樂易ある姿態と顯る。快活なる情狀を現すも。内よ深沈の性質おけまを。人よ尊敬せられ。西洋品行論

第三章 立志

○朱子曰く。學を爲まよハ。先づ須らく志を立つべし。志既ふ立てば。學問次第よ力を著

くべし。志を立てること定まらざれば。終り事を済さず。

○王陽明年十一。師ふ問ふ何を第一の事と爲し。師言ふ書を讀み及第するのみと。陽明は曰く。此未だ第一の事とせず。第一は事也。其^レ聖賢たる不在る。蓄徳録

○福格^{フツカク}斯^ス曰く。失敗をまじくも屈せず。進み往きて止まざる人も。吾が望の深く屬する所あり。一試して功を成し。浮泛ふして定らざ

る人み勝ること遠し。歐米立志金言

第四章 愛日

○晋の陶侃曰く。大禹ハ聖人あり。寸陰を惜めり。衆人小至りてハ。當り分陰を惜むべし。豈逸游荒醉をべけんや。生て時み益なく。死して後み聞ゆること無き。是^レ自^レうら棄るあり。

○人あり細々里王地^ニ富尼^ニ修士^ニ小請ふ。若し間暇あらば願くも謁見を得んと。王答へし

めて曰く。天我を戒め。常み間暇あらしめむ。

西徧 雜纂

○若克孫曰く。世上の財貨を。耗散せしと雖ども。後日の儉約。小因り償ふことを得る。今日失ふ所。比光陰を。誰り能く取り得る者有んや。歐米立 志金言

第五章 學問

○司馬温公曰く。書を誦を成さざる。益あらむ。或も馬上よあり。或ハ中夜寐らざる時

小在りて。其文を詠下。其義を思へむ。得る所多し。

○司馬温公。賓客小對し。賢愚長幼を問ふこと。亦く。悉く疑事を以て之を問ふ。苟も取る。處きおと有き。手小隨て記録し。或も客よ對して。即書し。率以て常と爲む。自警 編

○程子曰く。君子の學を必ず日よ新ふり。日小新なる者ハ日よ進む也。日小新ならざる者ハ必む日よ退く。未だ進まばして退るは

教者有らざる也。

○貝原益軒曰く。日日小新とよめる者ハ。一日も一日の工夫あり。一歳も三百六十日の工夫あり。若し積て十年小至らハ。其長進する所。測るべからず。故小學者ハ日々小新とよめることを貴ぶ。

第六章 勉強

○中庸小曰く。人一とびして之を能くせむ。己ハ百たび。人十たび志て之と能くす

れば。己も之を千とび。果して此道と能せば。愚ふりと雖ども必だ明ふ。柔ふりと雖ども必だ強し。

○漢の董仲舒曰く。事を勉強小在り。勉強して學問をせむ。聞見博くして智益明ふり。勉強して道を行へば。徳日小起りて大に功あり。

○漢に盧植も。馬融も學びて。能く古今小通ず。融が外戚ハ豪家あり。多く歌舞を列ぬ。植

待講をること積年。未だ嘗て回顧せざ。融是を以て之を敬き。後漢書 盧植傳

○銹の鐵と腐爛をるハ。砥石よりも疾く。怠惰に人死傷害をる也。工作の勞よりも速くあり。西洋品行論

○人の一生も。始より終り至るまで。經驗習練に大學校と看做を盡し。時ありて艱難辛苦の事も遇ふとも。之を天命なりと思ひ。務て學習せざるべからず。同上

第七章 倫常

○韓伯俞少して過あり。其母之を笞つ。伯俞涕下る。母は曰く。他日笞てども汝未だ嘗て泣くべ。今泣くも何ぞや。對て曰く。昔を笞してきて痛めり。今母衰老して力乏し。まゝ痛ましむること能はず。是故以て泣くあり。習是編
○顧悌父の書を得まば。必ず拜跪して之を讀み。句毎小應諾す。後子孫繁盛比ひあし。丹桂籍

○父母卑賤みして我幸ふ貴きことを得む。父母これ恩を忘るることなく。之を尊敬まる。若し高位高官小昇り。父母の恩を忘る者も其罪尤も大ありと云。勸善訓蒙

○貝原益軒曰く。毎日夙小起きて家庭を掃除し。先づ父母の氣色を候ひ。飲食乃好む所を問て之を進め。求めあはるは之を奉じ。勉免て其歡心を盡さべし。家道訓

第八章

處世

○呂叔簡曰く。世間往く處として意よ拂る事ふきえ無し。一日として意小拂る事ふ死ハ無し。惟度量寛弘ふれを受用の處あり。彼の局量褊淺ある者も。空しく自うら懊恨をるは。畜徳録

○人剛を好めば。我柔を以て之小勝ち。人術を用ゐまを。我誠を以て之感ト。人氣を使へば。我理を以て之を屈すまば。天下處し難きは事なし。神瑜

○人の我小負くと以て。善を爲は心の心を墮
きこと勿れ。其徳を施せよ當りて。たゞ自
ら我が心は忍びざる所を行ふのみ。未だ嘗
て報と責めざる也。縦ひよあらざる者小遇
ふも。只一笑よ付せよ。言金

○人ハ善性と發出せるハ。患難禍災より善
きをふ。譬へを香草の壓搾せらるる。都郁

さる香氣と發するが如し。西洋品 行論

○義爾士ス金の詩小曰く。禍難ハ苦痛と覺る

志むと雖ども。實小福慶の積塊あり。然まど
も禍難の中より福慶と視出を人少なり。余
を禍難を以て。余を試るは洪爐とふ。余を

鑄るの造錢局と思へり。西洋品 行論

○利久手テ爾ル曰く。人貧困と受くとも。何ぞ怨
謗不平の語を出せと用ゐんや。貧困ハ恰も
處女ハ耳残刺るゝの痛みよ過ぎざるのこ
而して其創れ中ハ貴重ハ寶玉を掛ること
を得る。歐米立 志金言

○衆人廣坐の中より、爭論を慎むべし。爭論を必ぶ黨派と起す。若し衆中小爭論發せむ。温厚の言。戲謔比語を以て。之と勸解を盡し。

智氏
家訓

○人乃謗果して實あらば。深く自くら悔責を盡す。躬小省りて愧づること無くんむ。只之と聽あるのみ。前人云ふ。何を以て謗りを止免ん。曰く。辯むること無し。辯むるはと愈力むまむ。謗ること愈巧あり也。金言

○凡、族衆假貸する所あらむ。吾が力量の厚薄は隨ひ之を與ふべし。必ざしも還せと言はず。縱ひ其欲小満さざして之を怨むるも亦償ひて責する時甚しきみ至らず。習是編
○事を處する。最熟思緩處を盡し。熟思を盡す其情と得。緩處すれば其當を得。最輕忽忙亂をべららば。至微至易の者と雖ども。皆慎重と以て之を處すべし。同上
○泛交なきは費多く。費多ければ營ご多し。

營之多者を求多し。求多ければ辱多し。惟事と省きて廉を養ひ。交を慎み。以て徳を成まべし。願體

○高きよ居て。みづりら卑くまきば。愈光あり。卑きふ居て。自ら高ぶまきば。愈望ふ静寄

軒文集

○凡、國家の禮文制度法律條例の類。若し能く熟觀して深考せば。以て世務小應酬し。時宜よ戻らざる瑜。

○富貴の家小。貧賤なる親戚は出入するハ。主人仁愛乃厚きこと顯き。其家の榮譽なり。然るも或は之を取る者あり。豈誤りからばや。家道訓

第九章 交際

○君子の交りや。道義を以て合ひ。志氣を以て親し。淡きこと水の如し。故小能く久し。小人は交りや。勢利を以て結び。酒食を以て親み。甘きと醴の如し。故小怨み易し。習是編

○貝原益軒曰く。君子の人小接る禮讓を以て之。故に争ふ所あり。夫れ才能を争ひ。功業を争ひ。權力を争ひ。意氣を争ふ。皆小人の爲を所。禮讓の道み非也。且禍と取る此道あり。

○人不義の事と爲を



を見を。諫めて之と止むべし。知て諫めず。諫めて力めど。友成して過ちを遂げ成さむるを。亦我が咎あり。智氏家訓

第十章 家制

○貧富俱に勤儉の三字と欠得ぬ。勤ハ孜孜利を爲さぬ非也。唯力を竭して經營するに在り。儉も鄙吝堪へざるは非也。只是入を量りて出をことを爲さる。習是編

○苟くも節儉みして。其家を保ち。其生と送

りふい。資産を小なきども精神は大なることと得べし。然らずして徒らよ金錢を慕ふ。此人を極て貧しと言ふも亦可あり。西洋品行論

○主人を一家の模範なり。我能く勤めを。衆何ぞ敢て惰らん。我能く儉ふらば。衆何ぞ敢て奢らん。我能く公ならむ。衆何ぞ敢て私せん。我能く誠ならば。衆何ぞ敢て偽らん。願體集
○他人に僮僕。我を遇する。或は不恭ふるも。

彼と我と主僕に分ふし。較ひるよ足らず。若し自己の僕婢を之を戒飾を智氏家訓

○權家此奴僕ハ。主人の權威を挾きて。賓客を侮り易し。主人よる者。時々心と用ゐて。無禮と戒むべし。奴隸に無禮を責むる小足らば。賓客患きて。其主人と誹る小至る家道訓

○陳確修曰く。此輩惟智慧あり。故小奴僕と爲る。若し亦智慧あらむ下賤と爲らざらむ。此

を以て心は存せむ。自ら苛求するに至ら
ぬ。丹桂籍

第十章 改過

○周子曰く。仲由を過を聞くことと喜びて
令名窮りふ。今人過あをむ。人の規をこと
と喜む。疾と護して醫を忌むが如し。寧ろ
其身と滅をもとも。悟るあやふし。

○魏の陽固も。少くして任俠劍客と好む。生
産を事とせず。年二十六。始て節と折り學を

好み。遂に博覽文才あり。魏書陽
尼傳

○唐の李安遠少くして檢束ふ。無頼の徒
と遊び。産と破る小至ふ。晚に節を折り學を
嚮ひ。士大夫に從ふ。苟くも己小勝をば。必だ
心を傾けて之小交る。安遠後懐州の刺史

小至る。新唐書
裴寂傳

○唐の趙武孟少くして游獵し。獲る所を以
て其母小饋る。母泣て曰く。汝書を好まざり
て敖蕩を。吾安んぞ望んやと。爲小食せず。武

孟感激し。遂に力學して右臺侍御史となり。河西人物志一篇を著す。新唐書趙彦昭傳

第十二章 警戒

○善と爲まは。重を負て山に登るが如し。志已小確しと雖ども。力おや及をざるを恐る。惡を爲まは。駿馬に乘て坂を走るが如し。鞭策を加へざると雖ども。足亦止むこと能ま

省心
雑言

○堯戒ふ曰く。戰々慄々として。日よ一日を

慎む人。山に躓づくこと無くして。埒に躓つくと。是故に人皆小害と輕し。微事と易どり。以て患を招くに至る。初學
知要

○貧賤を勤儉と生じ。勤儉を富貴を生じ。富貴に驕奢を生じ。驕奢を淫佚を生じ。淫佚を復貧賤を生じ。此循環の情理あり。多識
編

○一切の事。俱に儉朴誠實と要む。浮華と學ぶ。益あらざ。蓋し浮華を。一時を光耀せと雖ども。究に實事益あり。人の名と敗り禍及

得る者。都て奢侈の致を所ふ由る。石天基知世事

○人生。世ふ於て未だ心力と勞せざる者あらば。或も心を勞して力を勞せば。或も力を勞して心は勞せば。若し心と勞せば。又力と勞せざるを。乃ナ饑芋無用の人なり。瑜紳

○佐藤一齋曰く。少く才ある者も。往々好て人を輕侮し。人を調笑を。失徳と謂ふべし。侮を受る者徒らよ已まば。必だ憾みて之を譖る。即ち自うら譖るあり。言志録

○幼くして肯て長ふ事へば。賤くして肯て貴ふ事へば。愚みして肯て賢ふ事へば。此レも是人の三不祥あり。總て是傲氣害を爲さのみ。世人先づ傲氣を除き去り。纔ふ事を成さず得レん。知世事

○貴くして傲慢ある人も。氣球の膨脹して昇騰せる者ノ等し。只其外貌を裝飾して。内部も實小空虚あり。勸懲雜話

○日耳曼人の語小曰く。大人此品行の中ノ

於て其瑕疵あるを搜り出きを以て專務と
ふ人あり。痛べきの性情と謂西洋品行論。

○貝原益軒曰く。易小曰く。天道も満つるを
虧くと。又古語曰く。多く藏むまむ厚く失

ふと。蓋し多く財を聚めて人の貧苦を救え
ざるを。必ぶ其財失ふに至る。家道訓

○程子曰く。吾未ぶ財小畜みして。能く善を
爲す者を見ざる也。吾未ぶ誠あらざりて。能

く善を爲す者代見ざる也。畜徳録

○餘り有ると待て人を救まむ。必ぶ人を濟
ふの日なし。暇あるを待て書と讀まむ。終よ

書と讀むの時あり。瑜紳

○人の書籍を翻へし。人の書案を塗り。人此
花木を折り損ふえ。みふ人小厭むるの事

なり。竊りよ人此篋中の字跡を窺ふも。尤も
不可金言あり。

○仙徳培那徳言曰く。我他人より害を受くとも。
之を忍べむ。轉じて有用の物とあると得べ

一。唯吾が眞實の害とあり。苦患と與ふる者
も。自己の過失より由りて得ざるもの也。西洋品行論

○陳幾亭曰く。君子よ二の恥あり。能くをる
所小矜る恥あり。能くせざる所改飾る恥な
り。能くををを。謙して以て之よ居り。能くせ
ざれを。學びて以て之を充つ。畜徳録

○洪自誠曰く。耳中常小耳よ逆ふの言を聞
き。心中常よ心よ拂ふ此事あり。纔小是徳よ

進之行と修むるの砥石あり。若し言々耳と
悦む。事々心を快くせむ。便此生を把て鴆
毒れ中よ埋むるなり。菜根談

修身見訓卷之四終

附錄

楊子雲 前漢人 陸宣公 唐名 程子 宋人 顏之推 齊人
 荀子 周人 光武 後漢帝 劉秀 光 薛文清 明人
 陸桴亭 明人 韓退之 唐人 薛文清 明人
 魏環溪 清人 程漢舒 清人 馬援 漢人
 倪文節 宋人 甫 許平仲 元人 譚子 漢人
 吳懷野 明人 劉宗周 明人 司馬溫公 唐人
 陳幾亭 明人 章文懿 明人 陳了翁 明人
 胡文定 宋人 名 章文懿 明人 陳了翁 明人
 倪正父 明人 洪自誠 明人 周子 宋人
 韓伯俞 漢人 呂叔簡 明人 倪正父 明人 洪自誠 明人 周子 宋人

宋人名 陳璣 明人 蘇黃門 顧悌 陳確修
 張百戶 鄭叔通 梅鱗 履歷ヲ詳ニハ其
 彌爾烈爾 坡可羅 禮諾爾圖 勃
 古斯敦 英人 福格斯 谷惹西 戎孫 若克
 義爾士 金 那比爾 伯氏 倍根 又
 コルース プロナトン スマイルス リ
 ツトン 富爾拉 セシル 空林登 右十九
 詳ト大抵英國人ニ係ル 利久手爾 曼日耳
 ドモ 大抵英國人ニ係ル 利久手爾 曼日耳

修身詩訓 卷之四 手六 七 亂土載及

修身多言 卷之四

片居不非本

明治十三年十一月廿五日出版 免許
同十四年六月二日出版
同十五年五月卅一日再版
同十八年一月十九日五版御届

編輯出版人

東京府士族光風社長

龜谷

東京神田區金澤町土番地

大阪

柳原喜兵衛

發兌

大分 東京

岡梅原 川島真七郎 吉川正半七郎 牧野善兵衛 水野慶次郎 中野近次郎 石塚徳次郎 石川治兵衛

稟准

東京炎風社

明治十四年之冬以
後製本以此紙為証

定價銀五厘

郵 稟

東京茶風杯

好樂本必其滋益時
即於十四年冬

龜谷
行編

脩身兒訓

五

東 京 圖 書 館

新書門

十三部

八類

函

架

號

冊

K110,1

30a

5